

学位論文要約

日本語教師の成長ニーズと関連要因

— 中国の大学日本語教師を対象に —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 日本語教育学分野

D195755 成 利 楽

I 論文題目

日本語教師の成長ニーズと関連要因ー中国の大学日本語教師を対象に

II 論文構成（目次）

第1章 序論

1.1 研究背景と目的

1.2 本論文の構成

第2章 先行研究

2.1 教師の成長ニーズに関する研究

2.2 教師の成長ニーズの関連要因

2.3 日本語教師の成長ニーズ

2.4 研究課題

第3章 成長ニーズの構成概念と関連する個人要因

3.1 調査概要

3.2 分析結果

第4章 成長ニーズに関連する環境要因

4.1 調査概要

4.2 分析結果

第5章 成長ニーズに関連要因のモデル

5.1 調査概要

5.2 分析結果

第6章 総合考察

6.1 日本語教師の成長ニーズの構成概念とその特徴

6.2 日本語教師の成長ニーズと関連要因のモデル

6.3 本研究の意義と教育的示唆

引用文献

謝辞

III 論文要旨

第1章 序論

1.1 研究背景と目的

資質能力を代表とする教師教育内容に対する教師の成長ニーズを把握することは、教師の専門性を効率よく向上させる活動、いわゆる専門性開発の効果を左右する大きな要素として認識されている (Garet et al., 2001)。Levi-Keren & Patkin (2016) では、教師の成長ニーズを調査し、それに対応した専門性開発活動を実施した結果、教育的知識・能力のみならず、情緒的領域において、教師の成長に寄与することが実証されている。

教師の成長ニーズを分析する方法として、資質能力の記述文に対して、教師に自身の感じた成長の必要性あるいは成長させたい程度について段階評価をさせることがある。教師の成長ニーズの構成概念、あるいは高い関心を示している領域を明らかにすることで、専門性開発実践の内容選定や教師教育理念の再考につながると言われている。

教師の成長ニーズは個人要因と環境要因の相互作用で形成されたものだと言われている (Shriki & Lavy, 2012)。個人要因としては、資質能力に対する教師の自己評価と職能的アイデンティティが挙げられている。環境要因としては、国の教育環境 (Fang et al., 2021)、教室環境、学校文化などがある (Zhang et al., 2015)。

近年、日本国外で日本語を母語としない日本語教師が増加傾向にあるが、日本語教育学においてはそういった教師の専門性開発については十分に注目されていない。特に、中国における日本語教師は、非母語話者の割合が高く、複雑で多様な課題に直面している。

そこで、本研究では、教師の資質能力を取り上げ、中国の大学日本語教師の成長ニーズの構成概念を解明し、その成長ニーズに関連する個人要因 (資質能力の自己評価、職能的アイデンティティ) と環境要因との関係性を検証することを目的とする。

1.2 本論文の構成

第1章では、問題の所在と本研究の目的を述べる。第2章では、教師教育における教師の成長ニーズとその関連要因、そして、日本語教師の成長ニーズに関連する先行研究を概観し、残された課題、及び本研究の課題を提示する。第3章では、成長ニーズの構成概念、成長ニーズと関連する個人要因の構成概念を解明する。第4章では、成長ニーズに関連する環境要因を整理し、教師の置かれる教育環境を述べる。第5章では、成長ニーズと個人要因、環境要因の関係性を検討する。第6章では、各章の研究結果を総合的に分析し、日本語教師の成長ニーズの特徴とその形成に影響を与える要因について考察を行う。最後に、本研究で得られた知見に基づき、教育的示唆と今後の課題を述べる。

第2章 先行研究

2.1 教師の成長ニーズに関する研究

資質能力に対する教師の成長ニーズに関する研究では、教えるために必要な教科内容や教育的知識・スキルだけでなく、教えることを学び続けるために必要な職能開発実践能力も調査内容の一部となっていた。教師は、数多くのニーズを抱えている中で、現場の教育実践に即時的、かつ直接的な効果をもたらす内容を好む傾向があると示唆された。

2.2 教師の成長ニーズの関連要因

教師の持つ成長ニーズには、教師の資質能力に対する自己評価と教師の目指すべき姿（職能的アイデンティティ）という二つの個人要因が関係している（Borich, 1980）。一方で、教師は何かを学ぼうとするとき、あるいは自らの研修目標を設定するとき、必ずしも資質能力の自己評価を基準にしていけない可能性があり（Hu et al., 2014）、反対に、自分のコア信念に近い内容を優先させる傾向がある（山田, 2014）。環境要因に関しては、学習者のモチベーション、同僚教師との関係、組織文化、研修会や研究会のリソースや教育改革の実施などが教師の成長ニーズに直結していると言われている。

このように、資質能力の自己評価と職能的アイデンティティを代表とする個人要因、教室環境や同僚性といった環境要因は教師の成長ニーズとの間に何らかの関係性があると指摘されているが、その関係性についての検証がまだ行われていない。

2.3 日本語教師の成長ニーズ

日本語教師の成長ニーズに関する検討は1990年代からすでになされている。日本語能力の向上、教材の使い方、効果的な教え方や教室活動についての知識といった教授法関連のニーズが主であった（藤長, 2001；八田, 1995）。ニーズの特徴としては、教育実践の改善に即時的かつ直接的に効果をもたらすことが予期される領域に関心を持つ傾向があった。近年日本語教育を取り巻く環境が大きく変化したため、今の日本語教師はどのようなニーズを持っているのか新たに調べる必要がある。

成長ニーズに関連する個人要因については、自己評価と日本語教師の成長ニーズの関連性（木谷・坪山, 2000）が検討された。環境要因については、教師の置かれる教室環境や組織の期待（木田・柴原・文野, 1998）が言及されたが、その他の要因との関係性は検討されていない。

2.4 研究課題

以上の先行研究を踏まえて、資質能力に関する日本語教師の成長ニーズの構成概念及びそれに関連する個人要因について、以下を研究課題として設定する。

課題 1：中国人大学日本語教師の成長ニーズの構成概念は何か。

課題 2：中国人大学教師の成長ニーズに関連する個人要因（資質能力の自己評価、職能的アイデンティティ）の構成概念は何か。

課題 3：中国人大学日本語教師の成長ニーズに関連する環境要因は何か。

課題 4：中国人大学日本語教師の成長ニーズと個人要因、環境要因はどのように関係しているか。

第 3 章 成長ニーズの構成概念と関連する個人要因

3.1 調査概要

調査 1 の目的は、資質能力に関する日本語教師の成長ニーズの構成概念及びそれに関連する個人要因を明らかにすることである（課題 1，課題 2，課題 4）。

先行研究への精査を通して得られた日本語教師の資質能力（35 個）を元にアンケートを作成した。成長ニーズについては、提示した資質能力に対してどれほど成長させたいかを教師に 5 段階評価で選択を求めた。資質能力の自己評価については、提示した資質能力に対して自分はどれほど持っている・できていると思うかを 5 段階評価で求めた。職能的アイデンティティについて、提示した資質能力に対して、教師個人が考える優れた中国人大学日本語教師にはどれほど必要だと感じるかを 5 段階評価で回答を求めた。中国人日本語教師 104 名の回答を分析に用いた。

3.2 分析結果

探索的因子分析と確認的因子分析の結果、教師の成長ニーズの構成概念は「学習者に関わる能力」「外国語教育知識・能力」「職能開発実践能力」「研究能力」「授業力」であり、関連する個人要因の資質能力の自己評価の構成概念は「学習者に関わる能力」「外国語教育知識・能力」「職能開発実践能力」「研究能力」「授業力」であり、関連する個人要因の職能的アイデンティティの構成概念は「外国語教育知識・能力」「研究能力」「授業力」「学習者に関わる能力」であった。

教師の成長ニーズ、資質能力の自己評価、職能的アイデンティティの構成概念については、「学習者に関わる能力」「外国語教育知識・能力」「研究能力」「授業力」が共通していることが明らかになった。職能開発実践能力に関しては、教師の成長ニーズと資質能力の自己評価には含まれるが、職能的アイデンティティには含まれないという結果が得られた。

第4章 成長ニーズに関連する環境要因

4.1 調査概要

本章の目的は中国人大学日本語教師の成長をめぐる教育環境をふまえて考察することである（課題3）。

先行研究への精査と中国人大学日本語教師を対象としたインタビューを通して得られた21項目を元にアンケートを作成し、オンラインアンケート調査を実施した。中国人日本語教師213名の回答を分析に用いた。

4.2 分析結果

確認的因子分析の結果、中国人大学日本語教師の成長ニーズに関連する環境要因は、「教室環境」「同僚性」「組織環境」「専門性開発環境」で構成されていることがわかった。各要因の平均値より、中国人大学日本語教師は良好で、協力的な同僚関係に恵まれており、学習者とも良い関係を構築できていることが示唆された。「組織環境」や「専門性開発環境」について、中国人大学日本語教師は教育改革に直面しているにもかかわらず、学校・国・地方政府などから専門性開発の機会やリソースが十分に提供されていないという課題が明らかになった。

第5章 成長ニーズに関連要因のモデル

5.1 調査概要

本章の目的は、中国人大学日本語教師の成長ニーズの特徴を踏まえたうえで、教師の成長ニーズの形成に影響を与える関連要因のモデル化を試みることである（課題4）。

5.2 分析結果

教師の成長ニーズと関連する個人要因（資質能力の自己評価、職能的アイデンティティ）が調査1と同様の因子構造になるかを確認するために確認的因子分析を行った。それぞれの適合度を算出した結果、調査1と同様の因子構造を採用した。中国人大学日本語教師の成長ニーズの特徴について、各因子の平均値を確認した結果、教師が最も関心を示しているのは「研究能力」であり、その次は「授業力」「外国語教育知識・能力」「学習者と関わる能力」であった。「職能開発実践能力」の平均値が最も低かった。また、教師が「研究能力」「授業力」「学習者と関わる能力」「外国語教育知識・能力」に対して平均的な知識を有していると感じたにもかかわらず、さらに成長させたいと考えていることが示唆された。一方、「職能開発実践能力」について、自己評価の平均値が最も低かったにもかかわらず、教師の成長させたい程度が最も低かった。

成長ニーズと関連要因との関係性について、成長ニーズと個人要因、環境要因を用いて、構造方程式モデリングでモデルを構築し、モデルの適合度を確認した。その結果、成長ニーズに関連する環境要因については、環境要因は、直接的に成長ニーズに影響していると同時に、職能的アイデンティティを介して間接的にも成長ニーズに関連していることがわかった。つまり、環境要因が教師の何を成長させたいか、どれほど成長させたいかに対する意思決定において中心的な役割を果たしているといえる。そのうち、「専門性開発環境」と「組織環境」の影響力はより強く、「同僚性」と「教室環境」はほぼ同程度の影響力を示していた。個人要因については、職能的アイデンティティは成長ニーズに対して直接的で強い正の影響を与えていた。教師の目指している理想的教師像は、何を成長させたいか、どれほど成長させたいかに関する教師の認識に最も大きな影響を与えていた。一方、資質能力の自己評価は成長ニーズに影響を与えないことがわかった。教師が特定の領域について学びたいと考えるのは、必ずしもその領域の内容に対する自己評価の高低に起因しているとは限らないことが示唆された。

第6章 総合考察

6.1 日本語教師の成長ニーズの構成概念とその特徴

中国人大学日本語教師の成長ニーズの構成概念は、中国における外国語教育方針で示されている教師に求められる資質能力の枠組みとほぼ一致していた。成長ニーズの特徴について、先行研究と同様に、中国人大学日本語教師は、現場の教育実践に即時的、かつ直接的な効果をもたらす内容を好む傾向があった。

6.2 日本語教師の成長ニーズと関連要因のモデル

成長ニーズに関連する個人要因（資質能力の自己評価、職能的アイデンティティ）の構成概念について、「学習者に関わる能力」「外国語教育知識・能力」「研究能力」「授業力」が共通して抽出された。「職能開発実践能力」に関して、教師の成長ニーズと資質能力の自己評価には含まれるが、職能的アイデンティティには含まれないという結果が得られた。加えて、職能開発実践能力に対する教師の成長ニーズが最も低かった。先行研究を踏まえて考察した結果、「職能開発実践能力」が中国人大学日本語教師の職能的アイデンティティの一部として内在化されていない可能性があり、「職能開発実践能力」に関連する研修内容や機会の不足、一部の教師が「職能開発実践能力」の重要性を認識していないことがその不十分な内在化につながったと推察できる。

個人要因の一つである職能的アイデンティティは成長ニーズに対して直接的で最も強い影響を与えた。本研究の結果と先行研究の知見を踏まえると、教師の信念やアイデンティティは、授業中で何を教えるかだけでなく、専門性開発のために何を学ぶかを考える際の意思決

定にも影響していたことが明らかになった。

個人要因の一つである資質能力の自己評価は教師の成長ニーズと関連しないことが明らかになった。この結果は、Borich（1980）の予想と反した結果になり、Hu et al.（2014）などの主張と一致した。Huberman（1989,1992）のモデルを踏まえて考察した結果、発達段階によって、教師のニーズの形成ルートが異なる可能性があるかと推察した。

成長ニーズに関連する環境要因について、環境要因は直接的に成長ニーズに影響を与えているとともに、職能的アイデンティティを介して間接的にも成長ニーズに関連している。教師の成長ニーズは中国におけるトップダウン方式の教育システムと新しい教育理念を普及・具象化するために存在する研修体制に影響され形成されていると推察した。

以上のことをまとめると、個人要因の職能的アイデンティティのみが教師の成長ニーズに影響を与えており、その影響力は環境要因よりも強かった。つまり、中国人民大学日本語教師は、自らの職能的アイデンティティに関連性の強い内容について学びたくなる傾向がある。しかしながら、本研究は、中国人民大学日本語教師の職能的アイデンティティに課題があるということを発見した。その課題は、彼らの職能的アイデンティティに「職能開発実践能力」という構成概念が欠けているにもかかわらず、それを自らの成長ニーズの一部として認識していることである。そうすると、教師は専門性開発に取り組む際、「職能開発実践能力」ではなく、自らの職能的アイデンティティの要素である「学習者と関わる能力」「外国語教育知識・能力」「研究能力」「授業力」の関連内容を優先し、「職能開発実践能力」の開発が停滞したままになりかねない。このような悪循環から脱するには、環境からの刺激や働きかけが重要となる。中国人民大学日本語教師の成長ニーズはまず環境要因、とりわけ専門性開発環境と組織環境の影響を受けて、直接形成されることがある一方、職能的アイデンティティを介して、形成されたものもある。専門性開発環境や組織環境に恵まれていないにもかかわらず、自らの資質能力を高めようとする意欲が高いことから、恵まれていない専門性開発環境や組織環境が外的刺激として教師の成長を促す可能性があると考えられる。一方で、同僚や教室環境に恵まれており、専門性開発に対する意欲が高いことから、教師は同僚や学習者の力を借りながら専門性開発に取り組む傾向があると推察できる。環境要因が教師の成長ニーズに対して果たす役割はそれぞれ異なっていると言える。今後それぞれの環境要因の役割を考慮しながら、教師教育実践を展開していくことが求められる。

6.3 本研究の意義と教育的示唆

本研究の意義について、以下の4点が挙げられる。

本研究は中国人民大学日本語教師の成長させたい資質能力の構成概念を明らかにした。特に、外国語教師教育ではあまり言及されてこなかった「職能開発実践能力」というニーズを新たに抽出することができた点に本研究の新規性がある。

本研究は中国人大学日本語教師のニーズの構成概念は国の教育方針と一致していることを明らかにした。この結果は、中国におけるトップダウン方式の教育体制や教師教育体制に深く関連していると考察した。一方で、中国と日本の教育環境は大きく異なることから、本研究で明らかになった教師の成長ニーズを日本の教育現場にそのまま当てはめることはできないが、専門性開発における教師の主体性を重視するという点においては、日本国内における日本語教師の研修内容の検討にも有用である。

本研究は職能的アイデンティティと環境要因が教師の成長ニーズに与える影響を明らかにした。この結果は、教師の成長は、周りにいる他者や社会と関わる中で発達するものであることを裏付けた。よって、教員養成課程においては、教育実習生は、多様な環境に触れながら社会との接点を持つことで、自らの職能的アイデンティティの発達につながる。教員養成は大学や実習先だけで完結するものではなく、社会、世界とのつながりの中で実践されるものであることを教師教育者は認識する必要がある。

最後に、本研究の結果を踏まえて、専門性開発環境の質的・量的整備を通して、現職教師の職能的アイデンティティの変容を促し、継続的に専門性開発に取り組む教師を育成するためのモデルを提起した（図1）。

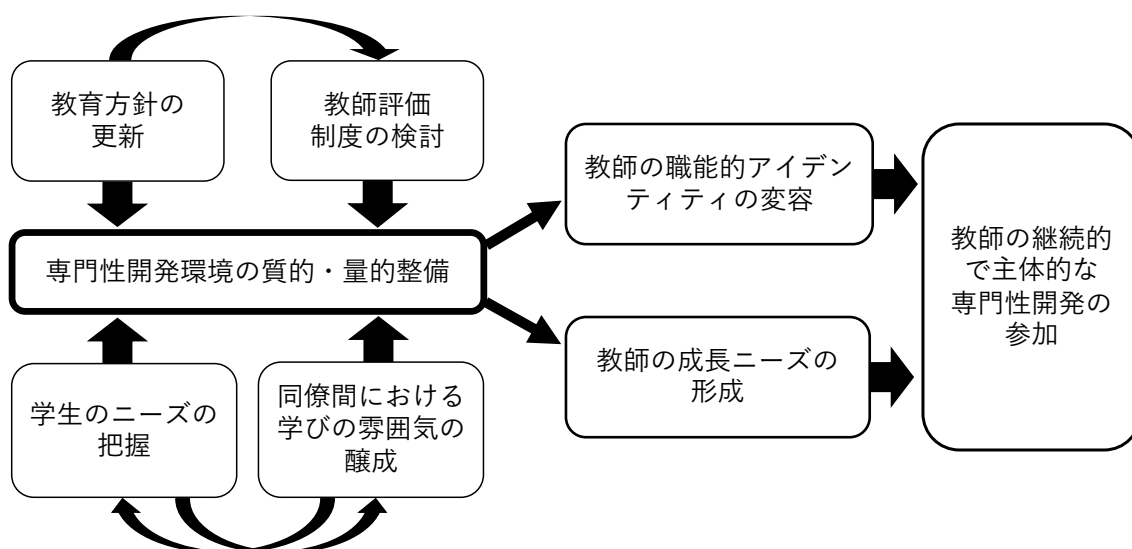


図1 教師の継続的な専門性開発を目的とする教師教育モデル

6.4 今後の課題

本研究では日本語教師の成長ニーズの全体的傾向について分析を行ったが、いくつかの課題が残った。まず、教師の教育歴によってその成長ニーズはいかに変化し、どのような要因が関連しているかを検討することである。また、中国と異なる教育環境にいる日本の日本語教師の成長ニーズと関連する要因を検討することである。最後に、本研究では教師の認識している成長ニーズを分析したが、今後の教師教育を改善していくには、教師教育を担当する

教師教育者はこれらのニーズをどう捉えているのか、教師と教師教育者の間に認識の不一致があるかを調査することも必要である。

引用文献

- Borich, G. D. (1980). A needs assessment model for conducting follow-up studies. *Journal of teacher education, 31*(3), 39-42.
- Fang, G., Chan, P. W. K., & Kalogeropoulos, P. (2021). Secondary school teachers' professional development in Australia and shanghai: needs, support, and barriers. *SAGE Open, 11*(3), 1-11.
- Garet, M. S., Porter, A. C., Desimone, L., Birman, B. F., & Yoon, K. S. (2001). What makes professional development effective? Results from a national sample of teachers. *American educational research journal, 38*(4), 915-945.
- Hu, B. Y., Zhou, Y., & Li, K. (2014). Pinpointing Chinese early childhood teachers' professional development needs through self-evaluation and external observation of classroom quality. *Journal of Early Childhood Teacher Education, 35*(1), 54-78.
- Huberman, M. (1989). The Professional Life Cycle of Teachers. *Teachers College Record, 91*(1), 31-57
- Huberman, M. (1992). Teacher development and instructional mastery. In A Hargereaves & M. G. Fullan (Eds.) *Understanding teacher development*. New York: Teachers College Press.
- 藤長かおる (2001) 「多国籍研修における教授法のコースデザイン：教師は何を共有できるか」『日本語国際センター紀要』 (11) 89-106
- 木谷直之・坪山由美子 (2000) 「研修参加者に見る非母語話者日本語教師の特性: 1994—1998 年度の調査結果から」『日本語国際センター紀要』 (10) 69-87
- 木田真理・柴原智代・文野峯子 (1998) 「Non-native 日本語教師の多様性把握の試み」『日本語国際センター紀要』 (8) 53-66
- Levi-Keren, M., & Patkin, D. (2016). Mathematics Teachers' Professional Development Program-Needs and Expectations. *International Journal for Mathematics Teaching and Learning, 17*(1).1-32.
- Shriki, A., & Lavy, I. (2012). Perceptions of Israeli mathematics teachers regarding their professional development needs. *Professional Development in Education, 38*(3), 411-433.
- 八田直美 (1995) 「外国人日本語教師のための日本語クラスについての試み」『日本語国際センター紀要』 (5) 55-68
- 山田智久 (2014) 「教師のビリーフの変化要因についての考察—二名の日本語教師への PAC 分析調査結果の比較から」『日本語教育』 (157) 32-46.
- Zhang, M., Parker, J., Koehler, M. J., & Eberhardt, J. (2015). Understanding inservice science teachers' needs for professional development. *Journal of Science Teacher Education, 26*(5), 471-496.